

第3回星野立子新人賞

消失点

小助川 駒介

トンネルに出口はありて新樹光
沢蟹のしずかに鋏振り挙ぐる
サ行なる吾子の寝息や青簾
タンカーの航跡曲がり西日中
かなぶんのぼつとり落ちて歩き出す
空蟬や忘れられるといふかたち
夏帽子読まれぬままの本の上
主なきビーチボールの橋の下
風死して市電の音の遠ざかる
炎昼やゴツホの貌の男ゐて
涼しさや大路を駆くる海の風
聖堂に遠のいてゆく蟬の声
青空の余地は少なし百日紅
老人と犬立ち止まり遠花火
今朝の秋床に散らばる積み木にも
その先に静かなる海赤とんぼ
鰯雲スカイツリーの低きこと
新涼の夜のホームに降りたちぬ
桃といふ名も知らぬ子の桃を食む
偶然も必然もなく小鳥来る
月影のさらさら落ちて海眠る
影淡し食卓にある瓶と梨
なびくべき時草なびく野分かな
秋風を開く頁の葉かな
杯を落として眠る月の客

長針の影の歩みや秋日差
闇に遇ふ一輪白き曼珠沙華
秋の雲銀座の窓をしずしずと
主役ゐて脇役もゐて虫の闇
虫の音を引き摺り歩く夜の道
眠る子の頬の涙や月明かり
栈橋の朽ちかけてゐる水の秋
秋澄むやトタンの上の影曲がる
秋晴れの成層圏に続く色
握りよき陶片拾ふ秋の浜
指先に臥待ち月をつまむひと
秋麗や美術館には監視員
秋風や絵本買ふ妻待つ間
よると来て哀れ蚊すぐにつぶさるる
風あれば風に戯る猫じゃらし
秋の庭首傾げればこきと鳴る
ゆるやかな花野の果ての登山口
波音のただ繰り返す夜長かな
母子像のスタンドグラス秋日濃し
終電を降りれば秋の深みゆく
スグソコと質屋の文字や冬隣
立冬の小猿の腕の速さかな
夕時雨逃れて走る人の影
新聞を床に広げる冬日和
小春日や線路の果てに消失点